



日本植物病理学会ニュース 第83号

(2018年8月)

【名誉会員・永年会員の略歴とお話】

名誉会員 白石友紀



1948年2月広島県生。1970年岡山大学農学部卒業，1970年10月同大学院農学研究科中退，1970年10月岡山大学農学部助手，1980年3月農学博士（名古屋大学論博），1985年4月岡山大学農学部助教授，1985年～1986年文部省在外研究員，1992年6月同教授，2000年4月同遺

伝子実験施設長，2003年4月同農学部長，2013年3月定年退職，同年4月岡山大学名誉教授，岡山県農林水産センター生物科学研究所所長，現在に至る。学会活動等：学会誌編集幹事，評議員，関西西部会長，学会長，賞選考委員，功績者選考委員等。受賞等：1980年日本植物病理学会学術奨励賞，1994年日本植物生理学会第1回論文賞，1995年日本植物病理学会賞，2014年米国植物病理学会賞，2017年日本農学賞・読売農学賞，2017年岡山県文化賞。著書等：新編植物病理学概論（共著）他。

研究内容：1970年代から糸状菌病の一種エンドウ褐紋病をモデルに感染成否の仕組みを解析した。当時，感染の成否は，感染の場に抵抗性誘導因子（エリシター）が生産されるか否かで決定されると考えられていた。しかし，褐紋病菌柄胞子発芽液の高分子分画には糖蛋白エリシターが存在していた。ところが，発芽液の低分子分画が共存するとエリシター活性は消失し，元々感染できないナシ黒斑病菌など多数の非病原菌が感染できるようになった。また，この低分子の感染誘導活性は褐紋病菌の宿主に限定されていた。これらの結果から，「宿主特異性決定因子」としての「サプレッサー」説を提唱した。その後褐紋病菌サプレッサー（suppressins A & B）の構造を明らかにし，サプレッサーの標的がバナジン酸（非特異的）と同様，ATPaseであることを示したが，細胞膜ATPaseに対する種特異的作用

は見いだせなかった。そこで，さらに上流の細胞壁 apyrase（NTP/NDPase）への作用を調べた結果，本活性が種特異的に阻害され，さらに apyrase と共精製される peroxidase の活性酸素生成活性も種特異的に阻害されることを突き止めた。異種 apyrase で形質転換した作物は，元々の病原菌に対する耐病性を獲得した。他に，マツノザイセンチュウ病枯損機構，バイオスティミュラントの探索等。

要望等：ご指導賜りました先生方，研究に携わられた皆様方に厚く御礼を申し上げますとともに，病理学全分野の益々の発展を心から祈念しております。

永年会員 家城洋之



1942年三重県生まれ。1965年三重大学農学部卒業，農林省に採用され蚕糸試験場に配属。1973年果樹試験場へ異動後は，興津，安芸津，つくばで病害研究室長を務め，2003年（独）農研機構果樹研究所ブドウ・カキ研究部長で退職。この間，熱帯農業研究センター長期在外研究員としてタイ国で2年間，熱帯果樹貯蔵病害について共同研究。また，JICA 果樹病害短期専門家としてインドネシア，ブラジル，ウルグアイへ，研究評価・調査チーム専門家として東南アジア，南米諸国に派遣された。オーストラリア，スペイン，中国で開催の国際カンキツウイルス学者研究者集会に出席して発表を行い，海外の研究者と交流を深めた。

研究活動：蚕糸試験場ではクワ白・紫紋羽病の発生病態，病原菌の侵入機構，抵抗性，防除法などの研究を行い，これらを取りまとめた1981年農学博士を取得した。果樹試験場ではカンキツウイルス，ウイロイド病の発生実態調査，無毒化処理法の開発，カンキツトリステザウイルス弱毒系統の探索・作出，干渉効果の確認試験を行い，有望弱毒系統 M-16A を果樹試験場育成カンキツ新品種の清見，

不知火（商標：デコポン）、はるみ、ぷちまるなどの無毒苗木に接種した健全母樹を育成し、日本果樹種苗協会を通じて配布する体制を確立した。沖縄や東南アジア地域で猛威をふるっているカンキツグリーンング病の現地調査、検定法の開発などの研究を行った。ブドウ、カキ、キウイフルーツの病害研究にも従事し、主要ブドウ品種の無毒苗木の作成、根頭がんしゅ病に対する品種抵抗性などの研究を行った。

著書：「果樹苗生産とバイオテクノロジー」（1990 博友社）、「市場病害ガイドブック」（1990 日本植物防疫協会）、「熱帯果樹の病害」（1994 国際農林業協力協会）、「原色果樹のウイルス・ウイロイド病」（2002 農文協）、「原色／カンキツ病害の診断と防除」（2006 化学工業日報社）、「原色／ブドウ・カキ・キウイフルーツ病害の診断と防除」（2008 化学工業日報社）、「原色／モモ・スモモ・ナシ・セイヨウナシ病害の診断と防除」（2009 化学工業日報社）など執筆・共著・編集を行った。

これまでご指導を頂いた諸先生方、研究を共に行った同僚、ご協力をいただいた都道府県研究者の皆様にお礼申し上げますとともに、本学会の益々の発展をお祈りします。

永年会員 要 司



昭和18年2月14日、広島県生まれ、昭和42年東京大学農学部農業生物学科（植物病理研究室）卒業、同年4月より神奈川県園芸試験場で野菜の栽培、病害防除試験研究に従事。昭和52年5月農業改良普及事業に転じ、平成2年より農業総合研究所経営調査科長、経営情報部長を経て、平成15年3月、生物資源部長で定年退職。同年4月から（社）農林水産技術情報協会で革新的技術基礎調査、融合新領域研究戦略的アセス調査、月刊誌編集、セミナーの開催等を担当。平成20年4月から平成26年3月まで（社）大日本農会で月刊誌編集、地域セミナー等を担当した。

植物病理研究に従事したのは、神奈川県園芸試験場での10年間であった。野菜の施設栽培の勃興期で、現場から持ち込まれる病害診断、連作障害要因となる病害の生態調査、農業、耐病性品種、弱毒ウイルスによる防除等に取り組んだ。中でも昭和45年～46年に大発生したイチゴのすくみ症の対策研究が思い出深い。栽培担当者と共同研究で、病理的視点から参画した。*Fragaria vesca* を利用した小葉

接ぎ法によるSMV、SMYEV、SVBV、SCVの検定、イチゴギケアブラムシによる伝染の確認をして、茎頂培養、薬培養によるウイルスフリー株を作出した。また、イチゴウイルスの検定法の改善の一環として、恩師與良清教授、土居養二助教授、奥田誠一研究員のご協力によりSVBV、SLAVの電顕観察について学会発表することができた。また、根から汁液接種可能なTNVを岸國平博士、斎藤康雄博士、我孫子和雄技官、宇田川晃技師のご協力により同定できたことは感激であった。本症の防除はウイルスフリー株を使えば完全に回避できることが判明したため、原母株となるウイルスフリー株の増殖、配布が実施され、すくみ症を呈する株は現地からほとんど消失した。この業績により、昭和51年に研究チームとして知事賞を受けた。

園芸試験場以後は幅広く農業振興に関係したが、色々な場面で病理学の成果を活用し、今でも地域の病害の相談に応じている。学会では大会運営委員をした程度でとても貢献したとは言えないが、この度永年会員に推挙いただき大変光栄に思い、感謝しています。W.スタンリーによるTMVの結晶化の成功に興味を持ち飛び込んだ植物病理学ですが、今後とも、基礎とともに、現場に生かせる研究の発展を期待しています。

永年会員 宮島邦之



1942年12月18日、北海道生まれ。1966年3月山形大学農学部農学科植物病理学教室卒業。同年4月北海道立上川農業試験場勤務、同病虫科研究員、1978年4月北見農試病虫予察科研究員、1986年4月同科長、1992年4月中央農試病虫部主任研究員、1994年4月十勝農試研究部主任研究員、1997年6月中央農試病虫部長、2000年4月上川農試場長、2003年3月退職。2001年6～2007年3月拓殖短期大学非常勤講師、2003年4～2004年3月大日本インキ化学（株）技術顧問、2004年4～2012年3月バイエルクロップサイエンス（株）技術顧問。

山形大学では、高橋喜夫先生のもとでイネいもち病菌の培養と葉鞘裏面接種検定法を学んだ。退官後も自宅でイネいもち病、ムギ雪腐病、ナシ火傷病などの研究の例をとりあげて研究のありようをお話し下さり、誠実、精密、反復実験の重要性を教示された。上川農試ではイネ葉鞘褐変病の病原細菌、発生態、防除法などを研究した。ハンガリー植物防除研究所 Dr. Klement, Z. からの分譲菌株との直接比

較試験により北海道の菌は新種であることが分かった。本病はイネ穂孕期の低温により多発するため寒冷地特有の病害とされていたが、1977年同環境にみまわれた東北地方にも及び、1982年ついにはアフリカの標高の高い地帯に至った。ブルンジの場合はベルギーカトリックルービン大学 H. Maraite 教授との共同研究により明らかにした。早期からの予防的薬剤散布は高い防除効果を示したがコストが難点であった。育成品種系統が本病に極めて弱いため優良品種候補に苦渋されたのは改めて本病の恐ろしさを痛感した。1983年3月本病の研究で北大から農学博士を授与（宇井格生先生）。1980～1997年主に、コムギ立枯病、条斑病、眼紋病、赤かび病、ジャガイモそうか病の防除対策について研究した。

植物病名委員会委員，2001年第21回植物細菌病談話会運営委員長

1989年1～9月東南アジアの稲病害実態調査およびイネ病原細菌の分類に関する共同研究（IRRI），1995年2～3月スリランカにおけるイネ病原微生物の探索・収集（生物資源研），1999年9月イネ細菌病に関するワークショップ—日中共同研究（生物資源研）。

この間、ご指導頂いた先生方、ご支援頂いた多くの上司、同僚、学会の皆様にご心より感謝し御礼申し上げますと共に、本学会の益々のご発展を祈念致します。

永年会員 森田 昭



1943年2月6日、佐賀県に生まれる。1967年佐賀大学農学部卒業。1968年長崎県に採用され、1968年から33年間長崎県果樹試験場（現長崎県総合農林技術開発センター果樹・茶研究部門）に、2001年から2年間長崎県総合農林試験場東彼杵茶業支場（現・同上）に勤務した。

長崎県果樹試験場の病害虫科では1968～1972年と1985～1989年の計10年間、果樹（ビワ）病害虫防除法の確立に、ビワ育種科では1973～1984年の12年間、大果・病害抵抗性の新品種作出に、落葉果樹科では1990～2000年の11年間、暖地落葉果樹栽培法の確立に従事した。1987年に「ビワがんしゅ病原細菌の類別とビワ品種の抵抗性に関する研究」で九州大学より農学博士を授与され、2001年に「ビワがんしゅ病の生理・生態に関する研究」で日本植物病理学会賞を受賞した。

長崎県果樹試験場病害虫科では各種病害虫の防除体系の

確立・ビワがんしゅ病原細菌ファージ3系統の発見・ファージおよび病原性によるビワがんしゅ病原細菌の類別・ビワのファイトアレキシン（aucuparin）の抽出・同定などをしました。県の試験場という立場から、長崎県在職期間35年の25年間は病理以外の研究に従事しましたが、絶えず農業現場のことを考え、研究の軸足は常に病理（ビワがんしゅ病）に置き、育種と病理・栽培と病理の境界領域の研究をしてきました。すなわち、本来の育種・栽培の研究の傍ら、ビワ育種科では病害抵抗性の早期検定法の開発・病害抵抗性品種の類別・抵抗性機作の解明など育種の病理を、落葉果樹科では病害発生を抑える栽培法・病原菌の樹冠内および樹園内における年次拡散・被害解析など栽培的病理の研究をしました。退職後は我が家に小さな研究室を作り野草の病害の研究を行い、日本植物病理学会九州部会や九州病害虫研究会などで発表しています。最後に、長年ご指導を賜った恩師・佐賀大学名誉教授野中福次博士に深甚の感謝の意を表するとともに、本会の益々のご発展を祈念致します。

永年会員 本吉総男



1934年11月20日東京生まれ、1960年3月京都大学農学部農林生物学科卒業、修士課程を経て1965年同大学大学院博士課程終了、農学博士。1965年12月京都大学農学部助手を経て、1966年3月農林省植物ウイルス研究所に入所、1972年3月より2年間英国ジョン・インネス研究所に出張、1982年4月農業技術研究所遺伝科室長、1983年12月農業生物資源研究所分子育種部室長、1989年2月同部長、1990年1月岡山大学資源生物科学研究所教授、1998年4月同所長、2000年3月退官。著書（共著）：「Plant Protoplasts」（1985年 CRC Press）、「Unifying Plant Genomes」（1996年 The Company of Biologists Limited）その他。

大学では、植物の遺伝学研究を行っていたので研究発表の場は日本遺伝学会でしたが、植物ウイルス研究所に入所したことにより日本植物病理学会に入会しました。なお、2000年には日本病理学会大会（岡山）の大会委員長を務めました。

私の主な研究は以下のようなものです。（1）4種の球形ウイルスのプロトプラストによる感染の研究、（2）トマトのトマトモザイクウイルス（ToMV）抵抗性遺伝子 Tm-1、Tm-2、および Tm-2a の特性の研究。Tm-1 は単一の細胞

内で働き、Tm-2とTm-2aは細胞の相互作用によってToMVの細胞間移行を阻止することを明らかにした。また、Tm-2による抵抗性を克服して増殖するToMVの自然突然変異体Ltb1に対してもTm-2aは抵抗性を示す。ところがTm-2/Tm2aヘテロの植物では、Tm-2aの抵抗性はLtb1の増殖を阻止できなくなる。残念ながらこれら遺伝子相互作用の究明は未完成であった。(3) キュウリ緑斑モザイクウイルスの弱毒株を作出した。この弱毒株は静岡農試によってメロンの玉壊疽症の防除に実用化された。(4) ToMV外被たんぱく質遺伝子を導入したToMV抵抗性トマトの作出。このトマトは日本では初めての組換え植物の隔離圃場での栽培に利用された。この研究により1993年に科学技術長官賞を受賞した。

ほかにウイルスと関係のない遺伝学に関する研究成果もかなりあります。

おわりに、長い研究生活の間、ご指導を賜った多くの方々、また共同研究をして下さった方々に、心より御礼申し上げます。若い研究者の方々には、独創的な研究を期待しています。そしてその成果を是非論文として発表して下さい。楽しみにしております。

【会員の動静】

1. 人事

(1) 大学関係

長谷 修	H30.4.1	山形大学 農学部 植物病理学研究室 教授
西尾 健	H30.3	[退職 法政大学 生命科学部 応用植物医科学研究室 教授]
津田新哉	H30.4	法政大学 生命科学部 応用植物医科学研究室 教授
柘植尚志	H30.4	中部大学 応用生物学部 応用生物化学科 教授

(2) 農水省関連独法関係

兼松聡子	H29.10	農研機構・本部 人事部 ダイバーシティ推進室 室長
窪田昌春	H29.11	農研機構・野菜花き研究部門 野菜生産システム研究領域 生産環境ユニット ユニット長
竹中重仁	H30.3	[退職 農研機構・西日本農業研究センター 所長]
大貫正俊	H30.3	[退職 農研機構・九州沖縄農業研究センター 生産環境研究領域 野菜病害虫管理グ

津田新哉	H30.3	ループ 主席研究員] [退職 農研機構・中央農業研究センター 病害研究領域 研究領域長]
三室元気	H30.4	[転籍 農研機構・中央農業研究センター 病害研究領域 生態的防除グループ 主任研究員]
石川浩一	H30.3	[退職 農研機構・果樹茶業研究部門 茶業研究領域 病害虫ユニット 上級研究員]
南 栄一	H30.3	[退職 農研機構・生物機能利用研究部門 植物・微生物機能利用研究領域 植物機能制御ユニット 主席研究員]
藤本岳人	H30.4	農研機構・北海道農業研究センター 生産環境研究領域 病害虫グループ 研究員
永坂 厚	H30.4	農研機構・東北農業研究センター 企画部 産学連携室 農業技術コミュニケーター
善林 薫	H30.4	農研機構・東北農業研究センター 生産環境研究領域 病害虫グループ グループ長
大藤泰雄	H30.4	農研機構・中央農業研究センター 病害研究領域 研究領域長
田澤純子	H30.4	農研機構・中央農業研究センター 病害研究領域 生態的防除グループ 上級研究員
大西 純	H30.4	農研機構・中央農業研究センター 病害研究領域 病害防除体系グループ グループ長
田中 穰	H30.4	農研機構・中央農業研究センター 病害研究領域 リスク解析グループ グループ長
竹原利明	H30.4	農研機構・西日本農業研究センター 企画部 産学連携室 産学連携コーディネーター
川上 頭	H30.4	農研機構・西日本農業研究センター 生産環境研究領域 病害管理グループ グループ長
大鷲友多	H30.4	農研機構・西日本農業研究センター 生産環境研究領域

藤原和樹	H30.4	虫害管理グループ 研究員 農研機構・九州沖縄農業研究 センター 生産環境研究領域 病害グループ 研究員	関原順子	H30.4	農業技術センター 主任研究員 富山県農林水産部 農業技術 課広域普及指導センター 主任
千秋祐也	H30.4	農研機構・果樹茶業研究部門 ブドウ・カキ研究領域 ブド ウ・カキ病害虫ユニット 研 究員	岩田忠康	H30.4	富山県農林水産総合技術セン ター 農業試験場病理昆虫課 上席研究員
白川 隆	H30.4	農研機構・野菜花き研究部門 企画管理部 部長	守川俊幸	H30.4	富山県農林水産総合技術セン ター 企画管理部企画情報課 課長
野見山孝司	H30.4	農研機構・野菜花き研究部門 野菜病害虫・機能解析研究領 域 病害ユニット 主任研究員	三室元気	H30.4	富山県農林水産総合技術セン ター 農業試験場病理昆虫課 主任研究員
鬼頭英樹	H30.4	農研機構・遺伝資源センター 微生物分類評価チーム 上級 研究員	岩波靖彦	H30.4	長野県病害虫防除所 中南信 担当 担当係長
柏 毅	H29.10	国際農林水産業研究センター 生物資源・利用領域 任期付 研究員	藤永真史	H30.4	長野県野菜花き試験場 環境 部 主任研究員
安藤康雄	H30.3	[退職 国際農林水産業研究 センター 生産環境・畜産領 域 プロジェクトリーダー]	山岸菜穂	H30.4	長野県農業技術課 中南信駐 在 専門技術員
服部 力	H30.4	森林研究・整備機構 森林総 合研究所 森林研究部門 き のこ・森林微生物研究領域 研究領域長	堀之内勇人	H30.4	岐阜県病害虫防除所 企画情 報係 係長
(3) 都道府県試験研究機関関係			浜崎健司	H30.4	岐阜県飛騨農林事務所農業普 及課 園芸産地支援第二係 技術主査
本田浩央	H30.3	山形県農業総合研究センター 研究企画部 研究企画専門員	田中広太	H30.4	静岡県経済産業部 農業戦略 課 (JA 静岡県中央会に出向) 主任
植竹恒夫	H30.4	埼玉県農業技術研究センター 病害虫防除対策担当 (兼病害 虫防除所 副所長) 部長	高橋冬実	H30.4	静岡県農林技術研究所 植物 保護・環境保全科 主任研究員
星 秀男	H30.4	東京都農林総合研究センター 食品技術センター 副参事研 究員	石井香奈子	H30.4	静岡県農林技術研究所 果樹 研究センター 上席研究員
小野 剛	H30.4	東京都農業振興事務所 振興 課 技術総合調整担当 課長 代理	加藤順久	H30.4	愛知県尾張農林水産事務所 農業改良普及課 主任専門員
菅原優司	H30.4	東京都産業労働局農業振興事 務所 中央農業改良普及セン ター 主事	永井裕史	H30.4	愛知県農業総合試験場 企画 普及部 広域指導室 専門員
松澤清二郎	H30.4	新潟県村上地域振興局 農林 振興部 普及課 課長代理	武山桂子	H30.4	愛知県農業総合試験場 環境 基盤研究部 病害虫研究室 主任研究員
佐藤秀明	H30.4	新潟県農業総合研究所 佐渡	堀川英則	H30.4	愛知県農業総合試験場 企画 普及部 企画調整室 主任
			黒田克利	H30.4	三重県農業研究所 基盤技術 研究室 副所長兼基盤技術研 究室長
			磯崎真英	H30.4	三重県農業研究所 基盤技術 研究室農産物安全安心研究課

有元倫子	H30.4	主幹研究員兼課長 滋賀県農政水産部農業経営課 副主幹	衛藤夏葉	H30.4	県農作物病虫害防除所(兼務) 副場長 所長
柴田隆豊	H29.4	滋賀県農業技術振興センター 環境研究部 病虫害管理係 技師	井上 興	H30.4	和歌山県海草振興局農林水産 振興部 農業水産振興課 主査
小幡善也	H30.4	滋賀県農業技術振興センター 環境研究部 病虫害管理係 技師	吉原茂昭	H30.4	山口県周南農林水産事務所 所長
津田和久	H30.6	京都府病虫害防除所 所長	米本謙悟	H30.4	山口県山口農林水産事務所 産地振興課 課長
木村重光	H30.6	京都府農林水産部 農産課 農業応援伴走支援担当 主査	亀代美香	H30.4	徳島県農林水産部 もうかる ブランド推進課 主査兼係長
岡田清嗣	H30.4	地方独立行政法人 大阪府立 環境農林水産総合研究所 経 営企画部 部長	佐藤泰三	H30.4	徳島県立農林水産総合技術支 援センター 資源環境研究 課・食の安全担当 研究係長
西岡輝美	H30.4	地方独立行政法人 大阪府立 環境農林水産総合研究所 食 と農の研究部 防除グループ 主任研究員	奈尾雅浩	H30.4	徳島県農林水産部 東部農林 水産局 主査兼係長
西村幸芳	H30.4	地方独立行政法人 大阪府立 環境農林水産総合研究所 食 と農の研究部 防除グループ 研究員	篠崎 毅	H30.4	愛媛県農林水産部農業振興局 農産園芸課 主幹
前川和正	H30.4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 淡路農業技術セン ター 所長	清水伸一	H30.4	愛媛県農林水産研究所農業研 究部 病虫害防除所 担当係長
神頭武嗣	H30.4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター病 害虫部 部長	三好孝典	H30.4	愛媛県東予地方局今治支局 産地戦略推進室 室長
西口真嗣	H30.4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター病 害虫部 研究主幹	山崎睦子	H30.4	愛媛県農林水産研究所 果樹 研究センター センター長
松本純一	H30.4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター病 害虫部 主席研究員	石井貴明	H30.4	高知県農業振興部 環境農業 推進課 専門技術員
相野公孝	H30.4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター病 害虫部 上席研究員	吉松英明	H30.4	福岡県農林水産部 経営技術 支援課 専技
大谷洋子	H30.4	和歌山県農林水産部 果樹園 芸課 農業環境・鳥獣害対策 室 主査	有村聖矢	H30.4	大分県農林水産研究指導セン ター 農業研究部 部長
江畑真美	H30.4	和歌山県果樹試験場うめ研究 所 研究員	樋口康一	H30.6	大分県北部振興局 生産流通 部 技師
増田吉彦	H30.4	和歌山県農業試験場 和歌山	樋口康一	H30.6	鹿児島県南薩地域振興局農林 水産部農政普及課 野菜普及 係 技術専門員
			尾川宜広	H30.4	鹿児島県農業開発総合セン ター生産環境部 病虫害防除 室 研究専門員
			大城 篤	H30.4	沖縄県農林水産部八重山農林 水産振興センター 農業改良 普及課 班長
			安次富厚	H30.4	沖縄県農林水産部農業研究セ ンター石垣支所 研究員
			新崎千江美	H30.4	沖縄県農林水産部南部農業改 良普及センター 主任

岩田忠康 H30.3 [退職 富山県農林水産部
農業技術課広域普及指導セン
ター 所長]

山下 亨 H30.3 [退職 長野県野菜花き試験
場 佐久支場 支場長]

加藤晋朗 H30.3 [退職 愛知県農業総合試験
場 山間農業研究所 所長]

三宅律幸 H30.3 [退職 愛知県農業総合試験
場 環境基盤研究部 病害虫
研究室 室長]

相野公孝 H30.3 [退職 兵庫県立農林水産技
術総合センター 農業技術セ
ンター 所長]

(4) 海外機関関係

黒瀬大介 H30.3 CABI, Invasive Species
Management, United Kingdom
Plant Pathologist

2. 学位取得者（課程博士・論文博士）

佐藤有希代 H30.3 東北大学 農学研究科 博士
(農学) キュウリモザイクウ
イルスに対する抵抗性タンパ
ク質 RCY1 の蓄積量を制御す
る分子機構の解析

越智昭彦 H30.3 東北大学 農学研究科 博士
(農学) イネばか苗病の育苗
期間中における感染動態およ
び防除技術の開発

二條貴通 H29.11 東京大学 農学生命科学研究
科 博士(農学) ファイト
プラズマのシグマ因子を介し
た転写制御機構に関する研究

Ngin Chhay H29.9 名古屋大学 生命農学研究科
博士(農学) The study on
sustainable integrated pest
management on rice in Cambodia

平山喜彦 H30.3 大阪府立大学大学院 生命環
境科学研究科 博士(応用生
命科学) イチゴ炭疽病の伝
染様式の解明と診断・防除技
術の確立

小玉紗代 H30.3 京都府立大学 生命環境科学
研究科 博士(農学) Studies
on plant surface signal perception
and infection-related morphogenesis

永井裕史 H30.3 of plant pathogenic fungus
Colletotrichum orbiculare

静岡大学創造科学大学院 自
然科学系教育部 バイオサイ
エンス専攻 博士(農学)
非病原性 *Xanthomonas* 属細
菌による同属病原細菌由来病
害の抑制に関する研究

平山喜彦 H30.3 大阪府立大学 生命環境科学研
究科 博士(応用生命科学)
イチゴ炭疽病の伝染様式の解
明と診断・防除技術の確立

【新入会員情報】

磯崎真英 三重県農業研究所

岡美佐子 高知県農業技術センター 生産環境課
主任研究員

【関連国際会議開催状況】

第12回国際植物疫学ワークショップ(The 12th
International Epidemiology Workshop (IEW12)) 参加報告

国際植物疫学ワークショップ(IEW)は4年に一度開催
される国際研究集会で、第12回目となるIEW12は6月10～
14日にノルウェー・リレハンメル(Scandia Lillehammer
Hotel)で開催された。ご存じの通り疫学(Epidemiology)
とは「個体ではなく集団を対象とし、疾病の発生原因や予
防などを研究する学問」であり、植物病理学においても伝
染源や伝染様式の解明や発生子察システムの開発のために
極めて重要な研究領域である。参加者は50名で、アメリ



会場の様子

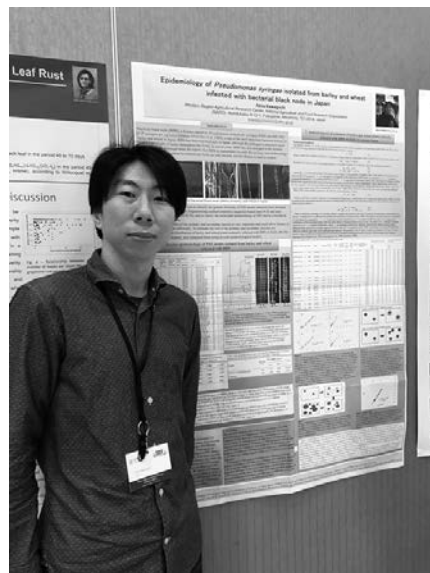


参加者の集合写真

カから 13 名（全て大学関係者）、次にブラジルとノルウェー（各 5 名）、イギリスとイスラエル（各 4 名）、スウェーデンとイタリア（各 3 名）と続き、オランダ、中国、アイルランド、スイス、カナダ、台湾、日本（小生一人）と様々な国籍の人種が集まった。参加者全員がワークショップ会場である同じホテルに宿泊し、朝昼晩と全てビュッフェスタイルで食事を共にし、夜はビールやワインを片手に熱く議論を交わすという小規模な研究集会である。小規模研究集会のメリットとして、参加者全員が口頭またはポスター発表をして皆の研究内容を把握し、名前を覚えることでほぼ全員と知り合いになれる点である。小生は IEW には初めての参加であったが、国籍を超えて非常に多くの知り合いができた。

口頭発表が 31 題、ポスター発表が 19 題で、1 つのホールで全ての口頭発表を行い、そのホールの壁にポスターを展示するといった、まさに全員参加型の研究集会であった。小生は「Epidemiology of *Pseudomonas syringae* isolated from barley and wheat infected with bacterial black node in Japan」という演題で、ムギ類黒節病の伝染源の解明と発生様式の空間分布解析についてポスター発表したが、ポスター発表者も全員がパワーポイントを使った 5 分間のショートスピーチが課せられ、ポスターの内容の要約を口頭で紹介した。口頭発表は 1 人 20 分、ポスターのコアタイムは 30 分だったが、皆が顔なじみになっているのでお互いに質問がどんどん出て議論が白熱し、小生もポスターコアタイム中ずっと話し続けて最後は喉が枯れる始末だった。その夜のビールとワインは格別であったことは言うまでもない。

発表演題は多岐に渡り、病害発生予測（予察）システムや防除支援システム（DSS）の構築、それも最近日本でも流行のビッグデータを活用したものの紹介もあった。また、



発表ポスターと報告者



Larry Madden 教授と記念撮影

病害の拡大に関する調査報告や数理モデルでの整理や解析、小生が発表した空間分布解析も他に数名が発表していた。特に興味深かったのは、この分野の世界的権威の一人である、アメリカ合衆国オハイオ州立大学の Larry Madden 教授による講演「Is disease intensity a good surrogate for yield loss or toxin contamination?」であった。どんな病害でも、疫学的研究の場合は対象圃場の発病程度の調査を行うものだが、それを盲目的に行っていないか、その数値が本当に圃場における農作物の減収や病原体による毒素の汚染（ここではカビ毒を例にした）の実態を表現できているのか、という疑問を投げかけた。Madden 教授は新しい理論を展開し、その疑問に答えることができる数理モデルを提案した。徐々に難解になっていく方程式や行列を見せられ、



参加者と夕食を囲むひととき

恥ずかしながら小生は完全には理解できなかったが、Madden 教授の「農業生産者の役に立つ研究をする」という熱意に大いに感銘を受けた。実は 2014 年にミネソタ州で開催されたアメリカ植物病理学会 (APS) 大会に小生が参加した時、Madden 教授と面識があったことから、本研究集会の前に空間分布解析に関するご自身の総説論文 (Phytopathology, 2018, 108: 656-780) をメールで送って下さり、この論文を読み込んだ上でノルウェーに乗り込んで再会を果たした。2014 年の APS の時は挨拶程度しかできなかったが、今回は十分に議論を深めることができ、大いに勉強になった。

全体的には病害発生予測システムの構築に関する発表が多い印象を受けた。前述のとおり、ビッグデータを活用したもの、将来的には人工知能 (AI) にそれを担わせるような将来展望もあった。しかしここでも、Madden 教授やコーネル大学の元・教授 Robert Seem 氏らを初めとして、非常に白熱した議論が展開された。議論の中心はやはり研究の出口で、「情報科学の急速な進歩により発生予測システムがどんどん開発されるのは良いが、それをいったい誰が使い、どのように防除意思決定に繋げるのかをよく考えるべきだ」という、この研究集会に集まった研究者の共通の研究姿勢が「農業生産現場への貢献が第一」であることに、本当に強く共感できた。

植物病理学における疫学研究は、特にアメリカでは多くの大学で研究が続けられており、それが参加者の数にも表れている。世界的には少しずつ世代交代が進んでいるようで、今回は若手研究者も多く参加していたが、世界全体の植物病理学者の中では疫学研究者の人口は決して多くない。しかし、農業生産現場に役立つ植物病理学研究として、疫学研究の重要度は極めて高いと考えている。特に参加者

の多くが農業生産現場に貢献する研究を共通語として持っている。今回、日本からは小生しか参加者がいなかったが、日本で疫学研究をしているのは小生だけではない。次回の IEW13 は 4 年後にブラジルで開催が予定されているので、次回は日本から複数名の参加者が望まれる。(川口 章)

【学会活動予定】

1. 部会

(1) 北海道部会

日時：2018 年 10 月 18～19 日

場所：北海道大学（札幌市）

(2) 東北部会

日時：2018 年 9 月 27～28 日

場所：山形テルサ（山形市）

(3) 関東部会

日時：2018 年 9 月 27～28 日

場所：東京大学弥生講堂（文京区）

(4) 関西部会

日時：2018 年 9 月 27～28 日

場所：山口大学吉田キャンパス（山口市）

(5) 九州部会

日時：2018 年 11 月 7 日

場所：宮崎市民プラザ（宮崎市）

2. 談話会・研究会等

(1) 第 53 回植物感染生理談話会

日時：2018 年 8 月 21 日（火）～23 日（木）

場所：高知大学農林海洋科学部

(2) 第 28 回植物細菌病談話会

日時：2018 年 8 月 23 日（木）～24 日（金）

場所：高知大学農林海洋科学部

(3) 第 14 回植物病害診断教育プログラム

日時：2018 年 8 月 27 日（月）～31 日（金）

場所：北海道大学農学部・農研機構北海道農業研究センター

(4) EBC 研究会ワークショップ 2018（第 14 回）

日時：2018 年 9 月 19 日（水）10 時～17 時

場所：東京大学農学部 1 号館 2 階 8 番教室

(5) 第 29 回土壌伝染病談話会

日時：2018 年 10 月 17 日（水）

場所：北海道大学農学部

(6) 第 12 回植物病害診断研究会

日時：2018 年 11 月 6 日（火）

場所：宮崎市民プラザ

【受章のお知らせ】

本会永年会員の鹿児島大学名誉教授、荒井啓氏が平成30年春の叙勲において瑞宝中綬章を受章されました。瑞宝章は公務や公共的な業務に長年にわたり従事して功労を積み重ね、模範となる成績を上げたことにより国が授与する章です。荒井啓氏は、ジャガイモ葉巻ウイルス、ソラメメ萎縮ウイルス、サトイモモザイクウイルス等のウイルス病やチャ、サトウキビなど南九州の作物病害研究において独創的、先駆的な研究成果を挙げられました。また、平成11年から17年まで鹿児島大学評議員を、平成13年から17年まで鹿児島大学大学院連合農学研究科長を務められるとともに、当学会の評議員や部会長なども務められ、当学会の発展並びに農学の教育・研究に多大な貢献をされました。（藤田佳克）

【関連学会情報】

第33回報農会シンポジウム

『植物保護ハイビジョン2018』のご案内

——わが国の農業に展望を拓けるか〈新しい技・強くて
柔らかい心〉——

趣 旨：社会、政治・経済、自然のいずれにおいてもグローバルな変化がますます拡大し、いっそう困難な状況に陥りつつある日本の農業だが、先行きの不安をよそに様々な分野で斬新なアイデアと柔軟で折れない心を武器に難問を突破しようと奮闘する人たちの存在はまことに心強い。今回のシンポジウムでは、植物保護分野を中心に、研究の現場、生産の現場にあって難問を克服してユニークな成果を挙げておられる方々に話題提供をお願いした。参加される皆さんともども前向きな議論を深められれば幸いである。

主 催：公益財団法人 報農会

協 賛：日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会、日本農業学会、日本雑草学会

日 時：平成30年10月23日（火）10:00～17:00

場 所：「北とぴあ」つつじホール（東京都北区王子1-11-1）

TEL 03-5390-1100（会場への連絡は出来ません）

JR 京浜東北線：王子駅北口より徒歩2分、

東京メトロ南北線：王子駅5番出口直結

開 会：10:00～10:15 挨拶

理事長 田付貞洋

講 演：10:15～11:05 最近の雑草問題—外来雑草・雑草イネ・除草剤抵抗性雑草—

農研機構 中央農業研究センター 黒川俊二

11:05～11:55 赤色ネットによる微小害虫防除
神奈川県農業技術センター
大矢武志

11:55～13:00 昼食・休憩

13:00～13:50 高濃度炭酸ガスによるイチゴの
ハダニ類の防除技術の開発と今後の展望

(株)アグリクリニック研究所

村井 保

13:50～14:40 畑の健康診断“ヘソディム”による
アブラナ科根こぶ病防除対策

三重県中央農業改良普及センター 鈴木啓史

14:50～15:40 わが国の水田農業に展望を拓く—
横田農場の生産現場から—
茨城県農業生産法人（有）横田
農場 横田修一

15:45～16:45 総合討論

参加費：一般 2,000 円

学生 事前申込み無料、当日 1,000 円

申込み：参加をご希望の方は、10月12日までに下記連絡先までEメールまたはFAXで所属・連絡先と氏名をお知らせ下さい。当日、参加費と引き換えにテキストをお渡し致します。なお、当日の参加も可能です。

連絡先：公益財団法人 報農会 事務局

〒187-0003 東京都小平市花小金井南町 1-12-11

BLOSSOM みさと

TEL/FAX 042-452-7773

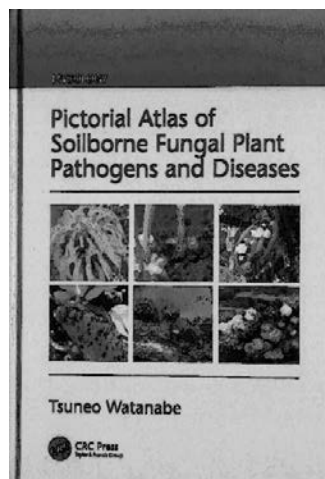
E-mail: khono511@car.ocn.ne.jp

【書評】

Pictorial Atlas of Soilborne Fungal Plant Pathogens and Diseases

Tsuneo Watanabe 著, 2018, CRC Press, Series Mycology, 276 p, £115, ISBN9781138294592 CAT#K3559

著者の渡邊恒雄氏は、1961年に東京大学農学部を卒業、カリフォルニア大学バークレー校大学院（植物病理学）で、1967年Ph.D.（博士号）を取得、農業環境技術研究所や森林総合研究所および定年退職後に勤務した産業技術総合研究所で土壌病原菌や菌類を30年以上研究し、約170の論



文にまとめている。また、「写真と図解土壌糸状菌」(1993) ソフトサイエンス社、393 p, および「植物土壌病害の辞典」(1998) 朝倉書店、272 p, など数冊を出版している。

1994年、著者が米国CRC Press社から出版した「Pictorial Atlas of Soil and Seed Fungi」は菌の形態や分類が中心であった。評判が良く、2010年には第3

版を出している。今回紹介する本は、視点を変え、豊富な写真をもとに土壌病害を中心にまとめたもので、つい最近(2018年2月)出版された。

土壌病害は環境・農業問題の重要なテーマである。しかし、土壌生息菌の生態は十分知られていないものも多く、防除が困難な病害も少なくない。本書は、土壌由来の病原菌や被害植物の写真を中心に構成されており、説明も幅広く、利用価値が高い。また、ATCCなどへの供試菌の委託についても詳しく書かれている。これは菌学・植物土壌病害菌・生態学を研究するうえで、ありがたい情報であろう。

また、生物防除のアプローチについても記述されている。著者の論文が中心であるが、2004年植物病理学会で行われた第1回教育プログラム「植物病害の診断・防除教育プログラム」の講義内容も含んでいる。

ここで、病害の研究例を見てみたい。

①沖縄のパイナップル土壌病害の原因究明、②小笠原での土壌菌研究、③台湾のサトウキビ株だし不良の原因究明、④スイスアルプスのPythium菌の生態・感温性、⑤パラグアイでのキリ枯損、⑥ドミニカ共和国のコショウ土壌病害の原因解明、などである。また、菌の形態・生態・感温性・生物防除などや土壌菌の有効利用としてのセルロース分解力についても言及されている。長年にわたって、体系的に収集された膨大なデータの蓄積があって、初めてできるものであろう。

また、著者の論文を中心に、真菌の病害・防除に関する文献リストも掲載されており、研究を進めるうえで参考になる。関連分野の研究者に広く推薦したい。

(元・農業生物資源研究所 白田 昭)

【学会ニュース編集委員コーナー】

学会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

藤田佳克、大島研郎、鈴木文彦、池田健太郎、染谷信孝

編集後記

学会ニュース第83号をお届けします。本号は、今年度推薦された名誉会員と永年会員のご紹介、会員の動静、大会などの学会活動の報告等々、盛りだくさんの記事を掲載しました。

新しく1名の方が名誉会員に、5名の皆様が永年会員に選ばれました。学会への多大なご貢献に深く感謝申し上げますとともに長年にわたる精力的なご活躍に対して敬意を表したいと思います。

今春も多くの方々に異動がありました。ご退職された皆様、長い間大変お疲れ様でした。職場やポストが変わられた皆様、心機一転、新しい仕事での益々のご活躍を祈念いたします。学位を取得された皆様と新たに会員になられた皆様をご紹介しました。皆様の今後の更なるご活躍を期待しております。

年末までの学会活動の主な予定を掲載しました。部会や談話会・研究会など多くの集いが開催されます。奮ってご参加いただきますようご案内申し上げます。

喜ばしいお知らせです。鹿児島大学名誉教授、荒井啓先生が瑞宝中綬章を受章されました。誠にありがとうございます。

今年2月に出版された「Pictorial Atlas of Soilborne Fungal Plant Pathogens and Diseases」を白田昭氏にご紹介いただきました。防除が困難なものが多い土壌病原菌の菌学・生態学研究において、説得力高く解説していただきました。関連分野の研究者に広く利用されるものと期待されます。

(藤田佳克)